

動車の操縦が至難であるかを窺知する事が出来るのであつた。

自動車は急坂なそして曲折した道路を登つて行く道はかなり広い段々登つて行くに連れてカーブはますます多くなつてくる。横手を俯瞰せば何百尺何千尺も知れない谷底だ。

そこには大杉、大檜が深々林立して高野山が千古の靈場たる事を無言のうち物語つてゐる様な崇峻な静けさである。車は終點極樂橋にいつた、之れから二十數町は自動テクシーである。海拔三千尺の高峰の道程は遠い十數日來より身體を害してゐる僕にはなかく苦しい、而し同志の勢力が強いのに引きづられて疲労もさういやら、ぎんぐ登つていつた、案内所の所に着いた時同志の二三が僕等を迎へて呉れた。

その人々の案内で爭議團本部の置かれてある普賢院に着く事が出来た、玄關には南海同志會宿所の看板をか、け會旗は堂々列べられて玄關は嚴重に警戒してゐる、門内に入れば多數の同志が各所からおゝ今か、今か、心配してゐたのだよ口々に言つてくれる、何もなく胸が躍る、本部たる一室に行きて先づ藤林君に會ふ、おゝ達者か(檢束されない意味の)おゝ答へる言下に二ツの手は力強く握られてゐた。

感極まつて涙がこぼれそふだ、おい大勝利だぞ、もう八百餘名登つてゐるぞ藤林君はさげふ、そうか痛快だなあ云ひつゝ御互の話は大濱公會堂で別れた後の苦心談の方へ落ちて行き、夢中で話してゐる處へ岸田、香西両君の顔が見えた。

おゝ無事か、ようゝ血盟の同志の挨拶が交される、あゝ我々の戦術は良い成功だ、唯だ一人福岡君の檢束を見たのみで他は皆無事である、うまくいつたなあ、うん、話し會ふうちにも各友誼團體よりの檄電、檄文は雪崩の如く飛込んでくる、檄文檄電の披露紙は本部を初めとして各宿所即ち常喜院、蓮花院、西門院、普門院に飛ぶ、活氣横溢した所の光景だ。

恍惚たる氣分よりさめて見れば過ぎし十二年の爭議に最も勇敢に戦はれた河本、石川両君に日本交通労働總聯盟の書記遠藤君も來て呉れて居る、挨拶をすませて、それより會長榊原氏を訪ふべく參謀本部たる山下亭に行つて見れば榊原會長はワイシャツ一枚の大元氣で訪問の新聞記者に應待してゐられる、片邊には伊藤、宮崎の二君並に東、伊藏君が參謀本部付書記として嚴張つてゐる、此處でも亦各自の苦心談數刻の後別れを告げて本部に歸る。

先づ各宿所の景氣が見たいので幸に机上にある今到着したばかりの檄電數通を握つて披露を兼ねて狀況視察に出かける、先づ蓮花院に行きて見るに、さうも此處の空氣は靜かに納まつてゐる、妻帯者の人が多い爲かと思つた。忽ちにして檄電の披露をやるに破れるが如き拍手を送つて呉れた、しかし何だか一時的な御付合氣分の人が多い様な拍手の様に考へられて心細く感じた、次に常喜院に向ふ此處は蓮花院に反對に若人ばかりだ、頗る景氣がよい、室に入つていつたのみでも自から昂奮を覺てくる、先づ檄電を披露した拍手は起る、氣持がよいので